

ジョークが好きなアイツが幻想入り

ゴッサム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

運命の劇場にて二人の男が戦い。そして一人の男が死んだ

### 「犯罪界の道化王子」

そう呼ばれた彼はやがて異郷の地で目覚める

そこは人々が忘れ去っていたモノたちがたどり着く場所  
冗談のような世界で男はジョークを飛ばし歩みを始める

目

次

死そして目覚め

ジョーカーと死神

裁かれる者。そして・・前編

7 4 1

## 死そして目覚め

「面白いことを教えてやろうか？」

目の前にいる男は、そんなことを言つた

もうすぐ死んでしまう俺への手向けの言葉かもしれない。

この俺に対してもジョークだつて？ハハツ、最高じやないか

続けて男は言う。

「お前がどれだけの悪行を働くこうと俺はお前を救う」

最初は聞き間違いだと思った

だが、コイツはジョークを言うような男じやない

俺とお別れになるつていうのに、なんて素敵な事をいうのだろうか

！

これだ！これこそ俺の求める男の姿だ！

「そいつはなかなか・・・笑えるね」

だから俺は賛辞を送ることにしよう

こいつが自らの矛盾に苦しむように、そしてその矛盾を抱えていく  
るよう

その姿を拝むことが出来ないことが残念だ

まあ、最高のジョークを聞けただけ満足しておこう

そうして俺は笑いながらこの世を去ることになつた

――はずだつた

意識があるという自覚を持つた時、死んだ男はニヤリと笑つた  
ここは地獄かな？地獄とはどんな混沌に満ちた世界なのだろうか  
!?

歓喜に似た感情を抱き、しかし瞬時に冷静になる  
まあアイツがいないんじや、面白くもないな・・・  
男はゆっくりと目を覚まし、体を起こす。

辺りを見回してみると霧が濃く状況がハツキリしない。ただ小舟  
の上に乗つて川を渡つてることが分かる

「おつ、やつと目を覚ましたかい」

突然声をかけられ、男は驚く。

霧でハツキリとしないが船頭にあるその姿は彼のパートナーに似ていたからだ。・・・もつともパートナーと見ていたのは向こう側であり、男は駒の一つにしか思っていなかつたが

「ハーレイ？ 何してるんだ？ そんなところで。もしかしてお前まで死んじまつたのか？」

それでも長年連れ添つた相方だ。自分を追つて自殺したかも知れない、という考えがすぐに思いつく

「お前まで死んでしまつてどうするんだ!? お前は俺様の名を広める役目があるだろう！ そして俺様の偉大なる墓を立てて、奴を苦しめてその様子を墓に刻み込むんだ！ それなのにお前は・・・」

長々と文句を言い続けるつもりだつたが、自然と口を止める。やがてハツキリと見えてきたその姿は彼女とは別人だつたからだ

「なあ、そのはーれいつて人がアンタにとつてどういう人か知らないけどさ、自分を追つて死んだ人間をそんな風に言うのもちよつとヒドイとアタイは思うよ」

大きな鎌を持った女は呆れた顔をしてこちらを見ていた

「こりや失礼。何分アンタによく似た女だつたから間違えるのも無理はないつてもんさ。そうだ！ あんたもメイクするかい？ そうすりや間違えないさ！」

男は小粋なシャレを効かせたところで、女を観察する

地獄の番人にしては迫力があまりにもないし、気軽に話しかけてくる点もマイナスだ

どうやら俺が想像していた地獄よりも現実の地獄はずつと退屈そうだ

その退屈を紛らわすため男はしゃべり続ける

「で、ここは地獄なのかい？ 地獄にしちゃ随分つまらない所だな。俺はもつとこう・・・火がドバツーと出たり、罪人どもの悲鳴で音楽を奏でてる連中がいたり、どこを見ても血で染まつてるような場所を妄想してたんだが・・・、まあ生きてる時でもそうだったがね」

身振り手振りで大きさに話す、ククツと笑う

その様子を見ていた女もため息を吐いた

「あのねえ、アンタが思つてたほど地獄はそんなに優しくないし、ここは地獄でもない。ここはこの世とあの世の境目、三途の川だよ。アタイは仕事でアンタをあの世に連れていく最中のさ」

「へえ、境目ねえ。そうすると貴方様は僕を連れて行こうとする死神様かい！ 鎌も持つてるし間違いない！ 頭が骸骨じやないのはキュートじやないが、その赤い髪は好みだ。」

矢継ぎ早に出る男の軽口に女は頭を抱える

「ヘイヘイ、どうしちまつたんだ？ まさか、お腹でも壊したのか？ そんな時はこれだ！ このコサーデジユから出る素敵なガスを吸い込むんだ。そうしたらあくら不思議！ 誰でもスマイル！ 問題があるとすれば笑いすぎて天に登っちゃうぐらいだな？ そんな奴いなかつた？ いたら俺の殺した連中だ！」

大声で笑う男に対して逆に女は顔しかめる。その顔を見た男は更に笑みを深めた

「アンタ、生前じや物凄い悪党だつたんだね。でも安心しなよ。アンタは今から裁判にかけられるんだ。そこで天国と地獄に行くか判決が下されるんだ。ま、アンタみたいな悪党は全員地獄にいったから、きっとアンタもそのお仲間入りさ」

女はそう言つて背中の鎌をこちらに向けてきた。どうやら男の発言が女の気に触つたらしい

しかし、男はまったく物怖じせず女をまっすぐ見て笑う。

やがて男は笑みの中から想像もつかないような低い声を発した

「Why so serious？」

これは幻想郷に現れた狂人——ジョーカーの冗談に満ち溢れた物語である。

## ジョーカーと死神

死神・小野塚小町は困惑と驚愕の中にいた

その理由は目の前にいる緑の髪と紫のスーツを着た狂氣の男・  
ジョーカーの存在

鎌を目の前に突きつけられてなお、その目に恐怖を浮かべず、逆に  
こちらを挑発するかのようにおどける

この男は死神をまったく恐れていないのだ

厄介な客を乗せちまつたねえ・・・

小町は表情一つ変えず狼狽していた

映姫様に見つかって働くうと思つて仕事を始めたらこれだよ。  
やつぱアタイはサボつてた方が世の中平和なんじやないかい?  
自分の上司に頭の中で愚痴を漏らし、改めて男を観察する

男は未だに此方を笑つた顔で見つめていた

コイツ・・・自分が死んだつていうのになんでこんなに嬉しいそう  
なんだい?

死ぬ事が目的?いや、コイツはそんなタマじやない。

死後の世界を見れたから?そんな奴いるのかい?

アタイが死神だから?・・・考えたくない

小町にはジョーカーという男が考えれば考えるほど不気味に見え  
た。

「汗一つ流したら負け」そんな考えが浮かんでくる。

しかし、そんな小町見透かしているのか、ジョーカーは笑つた口を  
大きく開けた

「ヘイ、死神ガール! いまからこのデツカイ鎌で俺に何しようつてん  
だい? 脅しのつもりならちよつと切るくらいが丁度いい。こんな風  
にな!」

瞬間、ジョーカーは己のスーツの内ポケットに手を入れ小町に迫つ  
た。

死神の鎌の大きさゆえ小回りが効かない小町はジョーカーの接近  
を許してしまう

しまつた！

小町は油断しているつもりは無かつたし、するつもりも無かつた。  
ただ何が起こったのか理解できなかつた  
ジヨーカーはただの人間である。空を飛ぶこともできないし、手から光線を撃つこともできない。正真正銘の『人間』なのだ  
その人間が死神である小町に『反撃』を行つた  
人間が神に挑んだのだ

小町は無意識にジヨーカーを人間の枠に嵌めてしまつていた  
それがこの状況を許したのである

無論小町に普通の人間の武器は効かない  
しかし、この男の出した殺氣に怯んでしまつた  
やられる！

そんなことは小町も分かつてゐる。分かつてゐるが相手はジヨーカーである。この男なら『何をしても不思議ではない』そう思わせる何かがこの

男にはあつた

その結果ジヨーカーの攻撃が当たる瞬間、小町は目を瞑つてしまつた

・・・・・

しかし、いつまで経つても痛みはやつてこなかつた

恐る恐る小町は目を開けると、まつすぐジヨーカーの腕は自分の頬に伸びていた

小町はその腕を辿るように視線を動かす。やがて手の部分まで見てみると、そこには一枚のカードが差し出されていた。

それは外界の絵札だつた

「これは・・・」

小町はゆつくりカードを手に取り、笑顔を絶やさないジヨーカーに尋ねる

「俺の名刺だ。こんなキユートな女の子に相手してもらえるんだ、社交辞令つて奴さ。それに死神が俺の名前を覚えるつてのもなかなか気分が良い。それとも何かい？こんな虫けらの様な男の名前を知ら

ないほうがいいかい？そいつあ、人生損してるぜ！」

ククツと笑うジョーカーとは対称的に小町は言いやうのない気分になっていた

アタイにはこの男を測りかねない

小町のジョーカーに下した人物像が決定された瞬間だった。おどけた態度からさつきの攻撃まで、小町はこの男の考えている事が理解できない

いや、理解しようとすればするほど遠ざかっていく。

しかし、これだけはハッキリ分かる。

コイツはこの状況を楽しんでいる

常人ではありえない思考、まさに狂氣の体現とも呼べる

小町の警戒度は上昇を続けていた

「どうした？殺さないのか？アンタなら俺を殺すの簡単だろ？ん？俺はもう死んでるから殺せないのか？んん？」

相変わらずジョーカーはフザケる事を止めない

小町は覚悟を決めるように話す

「アンタは厄介だね」

「よく言われる。耳タコだ」

「やつぱりアンタは地獄行きだよ・・・」

やがて二人を乗せた小舟は岸へと辿り着いた

## 裁かれる者。そして・・・前編

目的地に着いたであろう二人を出迎えたのは、小町にとつては見慣れた職場、ジョーカーにとつては初めて見る建物だった  
「フム・・・、これぞジャパニーズジンジヤだな。俺以上にうるさい女記者の書いてる雑誌でみたことがある。あの建物にはきっと大量の二ンジヤがいるに違いない！」

「へえ、アンタ以上にお喋りな奴がいるのかい？」

「いるさ、あいつらに比べたら俺は謙虚なほうだ」

シユシユツと手裏剣を飛ばすフリをするジョーカーとそれを見つめる小町。

一見和やかな風景に見えるが、小町の胸中には複雑な思いを抱いていた

果たしてこの男を映姫様に会わせてよいのだろうか？

当然の疑問であった。彼女の上司である四季映姫・ヤマザナドウは閻魔であり、幻想郷の死者の魂の全ての行き先を決定する裁判官なのだ。

彼女がこの男を一目見れば「白黒をはつきりつける程度の能力」によつてジョーカーを地獄行きにすることは非常に簡単だ。  
問題はその過程、ジョーカーがタダで地獄行きに納得する訳がない。何かしらの危害を加えてくる可能性がある。

次に映姫がジョーカーを覗た影響も視野に入れなければならぬ。能力によつて映姫も常人とは違う目線で人間を見る。通常の感性でもこの男が偽りない狂気だと分かるが、彼女が見てしまつたら違うモノが見えるかもしれない。もしそれが彼女に悪影響を及ぼしてしまつたら・・・

小町は考えに考える

しかし、その考えを見透かしたように道化師は宣言する

「さあーいよいよこのジョーカー様が裁かれる瞬間だ！もし俺が天国に行こうもんなら最高のジョーカーだよなあ・・・おつと、裁判においてもつとも重要なのは裁判官の心象だ。これはいけない、忘れるど

ころだつた。なあ！」

何を言つてるんだコイツは。

本当に裁判を受けるつもりなのかい？まさか……逃げるつもりなのかも

有り得なくはない、今までのジョーカーの言動から何をしてかしても可笑しくはない。

ここで小町は間違つた選択をしてしまつた。この男はきっと逃げるだろうと判断したのだ。

ジョーカーをよく知つてゐる人間はこう言うだろう

「奴は我々が考えうる最悪の……その一步先を行くだろう」と。

「挨拶をしなくちゃあな」

「え？」

小町は聞き間違いだと思つた

「なあに、きつとお堅い奴なんだ！頭にデカイ穴でも開ければ風通しが良くなつて俺様の声もよく聞こえるだろう！」

ジョーカーは映姫を殺すつもりだつたのだ

小町がそう解放し、急いでジョーカーを止めようとして既に閻魔庁に入つていく奴の姿が見えた

「喜べよ死神ガール。お堅い頭の上司が消えるんだ！明日からノビノビと仕事に励むこつたな！」

別れの挨拶と言わんばかりに扉を閉めるジョーカー

「・・・っ！」

油断した！どうしてアタイはまた油断したんだ！

駆け出す小町だったが、その頭は憔悴と後悔に支配されていた。舟の上といい小町はジョーカーに対する危機感を持つてゐるつもりだつた。だが、これほどまでとは思いもしなかつた。

小町ここで愕然とした。

これがアタイのやり方つて訳かい？

氣づかぬ内に他人の心の隙間に入り込み、愚者を装い狡猾さや殘忍さをひた隠す。

まさに邪悪な道化師のような男

小町はこの瞬間、正しくジョーカーの一端を理解した  
だつたら出し惜しみは無しさ！

小町は己の「距離を操る程度の能力」を発現させ、ジョーカーとの  
距離を一気に詰めようとする！

しかし

小町の眼前に男は無く、ただ闇が広がつた。  
どこからともなく声が聴こえてくる

「ウフフ、駄目よ。彼にはやつてもらわなくちゃいけないことがある  
の」

その声は聞き覚えのある声だった

小町は唸るように声を搾り出す

「八雲……紫……」

~~~~~

てつきり追つてくると思つたんだがな

ジョーカーは背後の気配に注意しつつ、闇魔序の廊下を驅ける  
さあて、裁判官様つてのはどの部屋にいるのかな？

一見、ジョーカーという男は行き当たりばつたりの犯罪者かのように  
思えるが、実際はそうでない。綿密な計画を立て、準備を万全に整  
えた後に犯罪を行うのだ。

「犯罪界の道化王子」

の異名は伊達ではない。

そのジョーカーが行き当たりバッタリで行動を起こしたのは理由  
がある

第一に、彼は自分が死んでいると知覚しているので半ば自暴自棄にな  
つてている節がある

第二に、非現実的な場所であるために十分な物資が調達できない  
第三に、使える駒がない

そして最後に、張り合う相手がない

もし、これらの問題が解消されるのであれば、彼はどんな地であろ  
うと大手を振つて犯罪を起こすだろう

だが、現実はそうではない

現在の彼は己の本能の赴くままに動いているのだ。

やがて、彼はとある少女を見つけた。見る限り10歳前後、帽子とスカートの裾から人間ではない耳やら尻尾が見えるが些細な問題だこいつは運がいい

「そこのスウェイートベイビー、実はおじさん道に迷っちゃったんだけど、ここの一番偉い人がどこか教えてくれるかい？Jおじさんの一生のお願いだよ。ほら教えてくれたらキャンディーも上げよう」

甘い声を出し、ナイフを後ろ手に隠しながら目的地を聞き出す

「え、偉い人ならそこにいるよ」

困惑した様子の少女が震えながら声を出し近くにあつた扉を指差す。

どうやら知らず知らずの内に近づいていたらしい

「そうかい、そいつはありがとよ。おつと約束のキャンディーを上げなきやな！キャンディーもいいけど……スペクタクルなショリーはもつといいぜ！」

そう言つてジョーカーは少女の首を引っ掴み隠していたナイフを突きつける

「おつと勘違いするんじゃないぞ。いわゆる人質つて奴で別におじさんは口リコンつて訛じやないんだ。ただこれから偉い人と話すんだけど、お嬢ちゃんがいてくれたら会話が弾みそうだから、さ！」

言い終わると同時に扉を蹴破る。中に入るとそこには人質と同じ年くらいの少女が裁判席に座っていた

「何なんですか貴方？部屋に入る時はノックをしてから入りなさい」「ああ？こりや何の冗談だ？」

かくして、四季映姫・ヤマザナドウによるジョーカーの裁判が歪な形で始まつた